RIVER FUND

河川基金だより

川を愛する人のために

河川基金

2020
October

Vol. 43

公益財団法人
河川財団

22 世紀へむけた郷川づくり

上西郷川日本一の郷川をめざす会（福岡県福津市）

「上西郷川日本一の郷川をめざす会」は上西郷川を舞台に、子ども達が中心の「川遊び体験」「防災・環境学習教室」「清掃美化活動」その他イベントを開催しています。

学校との連携は勿論のこと、様々な活動を通して多世代が交流できる環境づくりに力を入れています。その活動は子ども達を健全に育成する環境づくり、ネットワークづくりなど、重要な役割を担っています。

生物多様性アクション大賞審査員賞の受賞や NHK ワールドの TV 番組「デザイントークプラス」の放送を通じて上西郷川地域の魅力を多くの方へ発信しています。

河川基金は、川づくり団体「上西郷川日本一の郷川をめざす会」を応援しています。

上西郷川における環境学習の様子

河川基金へのご寄付は
全国の川をより良くする活動へと
つながっています。

河川基金

TOPICS

04 2021 年度河川基金助成の募集を開始

09 2021 年度（令和３年度）河川美化・緑化事業の募集を開始しました

INTERVIEW

GoodPractice

河川基金だよりでは、様々な川づくり活動に取り組む皆さまにとって、その活動の参考となるような Good Practice についての情報発信と共有を目指していきます。

今回は、河川基金を活用して全国各地で活動されている方々のなかで、下記の方々からその活動の様子やメッセージをお聴きしました。

10 ドローンを活用した教材開発に挑む
WEB ページを活用した新しい教材作成
古川第一小学校　校長　前田 正さん、教務主任　熊谷 俊祐さん、教諭　遠藤 拓海さん

14 ひたかみ水の里
NPO 法人ひたかみ水の里　代表理事　新井 偉夫さん、理事　新井 高広さん

17 自然体験が保育理念の基本。そこに子ども達の笑顔が！
NPO 法人つくばハーモニー　ラ・フェリーチェ保育園　園　長　髙橋 晃雄さん
副園長　齋藤 隆さん

20 トンボの生態から薬剤耐性菌を探る、ジュニア研究者の奮戦
市立札幌旭丘高等学校　生物部（２年）葉山 結月さん 、生物部顧問　大宮 祐男さん

INFO

23 御礼 ご寄付の御礼

24 紹介 河川財団は「紺綬褒章」の公益財団認定を受けています

表紙写真　大崎市立古川第一小学校提供
「ドローンからの眺め」
場所：江合川　大崎市古川辺り上空

TOPICS

2021 年度

河川基金助成の募集を開始

■ 募集期間

2020 年（令和２年）**10 月 1 日 ～ 11 月 16 日**

■ 申請方法

インターネットによるオンラインで申請してください。

※詳細につきましては河川財団ホームページにてお知らせいたします。

www.kasen.or.jp　河川基金　検索

3 部門（河川基金）

河川基金助成の 3 つの部門

1　研究者・研究機関部門

防災･減災や河川･流域の視点から、治水･利水･環境に関する新たな科学的知見を得る取組みや新技術の開発に向けた調査・研究を行う、大学の研究者や研究機関等に助成を行っています。

2020 年度：95 件（約 8590 万円）

【写真提供】 九州大学大学院　教授　矢野真一郎様

2　川づくり団体部門

河川や流域への理解を深めることにより、川や流域をより健全な姿に変える、あるいは戻すための活動などを行う市民団体等（川づくり団体）に助成を行っています。

2020 年度：84 件（約 8190 万円）

【写真提供】 筑後川まるごと博物館

3　学校部門

学校教育の現場において、河川・流域を通じて防災や環境等を学習する河川教育に取組む小・中・高等学校等に助成を行っています。

2020 年度：72 件（約 1800 万円）

【写真提供】 ろりぽっぷ学園ろりぽっぷ幼稚園

2021 年度　河川基金　助成一覧

助成部門	助成対象者	助成区分	期間	助成金額
研究者・研究機関部門	学会等団体	一般的助成	1 ～ 2 年	200 万円（上限）
		緊急災害調査	1 年	300 万円（年度総額）
		学術図書出版助成	1 年	100 万円（上限）
		アウトリーチ活動 A	1 年	200 万円（上限）
	一般研究者	一般的助成（60 歳未満の研究者）	1 ～ 2 年	100 万円（定額）
		学術図書出版助成	1 年	100 万円（上限）
		アウトリーチ活動 B	1 年	100 万円（定額）
		アウトリーチ活動 C	1 年	50 万円（定額）
	若手研究者	一般的助成（35 歳以下の研究者）	1 ～ 2 年	60 万円（定額）
	ジュニア研究者（クラブ活動に対する助成）	高等学校のクラブ活動	1 年	30 万円（定額）
		中学校のクラブ活動	1 年	20 万円（定額）
川づくり団体部門	流域川づくり団体	活動 A	1 年	100 万円（定額）
		活動 B	1 年	60 万円（定額）
		活動 C	1 年	30 万円（定額）
	全国川づくり団体	活動 A	1 年	500 万円（上限）
		活動 B	1 年	100 万円（上限）
	新設川づくり団体	新設川づくり団体自立支援助成	1 ～ 5 年	毎年 50 万円（定額）
学校部門	幼稚園、保育所、認定こども園等	幼稚園、保育所、認定こども園等	1 年	10 万円（定額）
	小、中、高等学校、特別支援学校等	河川教育とりくみ支援	1 年	10 万円（定額）
		単学年（単学年での取り組みが対象）	1 年	20 万円（定額）
		複数学年（複数学年での取り組みが対象）	1 年	40 万円（定額）
	幼稚園、保育所等 小、中、高等学校等	河川教育に関する実践的研究（カリキュラム、教材等の開発が対象）	1 年	50 万円（定額）

※中学校・高等学校におけるクラブ活動は、「研究者・研究機関部門」のジュニア研究者（クラブ活動）へご応募いただけます。

TOPICS

2021年度（令和３年度）河川基金助成募集要項の主な変更点

次年度募集要項の各部門における主な変更点は次の通りです。これを踏まえ、申請様式も変更していますのでご注意ください。

■研究者・研究機関部門

・審査項目及び審査基準の見直し

研究成果の価値を的確に審査できるよう、「研究の優位性」を項目に加えることとしました。また、継続研究として申請される方も多いことから、この場合には前年度の研究内容との関係と発展性を確認することを明記するなど審査項目及び審査基準を再整理し、併せて応募様式の見直しを行いました。

また、ジュニア研究者（クラブ活動）についても、学校のクラブ活動で行われる研究であることを配慮し、簡略化の方向で審査項目及び審査基準を整理しなおしました。

・学会等への参加経費対象の拡大

これまでは、河川基金による研究成果（過年度研究成果も含む）を論文発表する場合に、学会等への参加費、学会等への参加に係る宿泊費、交通費を認めていましたが、河川基金による研究成果をとりまとめていく上で、学会等に参加し、意見交換、情報交換等を行うことが必要な場合には、助成の対象として認めることとしました。

■川づくり団体部門

・審査項目及び審査基準の見直し

活動の内容に係ること、関係者との連携に係ること、団体の活動を自律的、継続的に展開するための展望に係ることに再整理することにより、重点的に支援を行う活動、慎重に審査を行う活動についてより的確に審査が行えるよう審査項目及び審査基準の見直しを行いました。

川づくり団体部門では、①次世代を担う人づくりの活動、②新しいニーズやニーズの変化に即した新規事業、③若手による取り組みや自律的展開への展望を持った活動を重点的、優先的に支援していきます。一方、前年度に採択され、継続して申請する事業については、ａ）過年度の目標が達成されているか、ｂ）過年度の反省や教訓を踏まえ、目指す成果や内容がさらに発展しているかについて慎重に審査を行うこととしています（なお、上記の項目を満たしても、連続５年以上助成されたものは採択にならない場合があります）ので、活動を計画される際に考慮して頂ければと考えます。

・活動区分の適切な選択（注意）

活動予算の規模とコース選択が食い違っているのではないか（例えば、申請額が「活動Ｂ」コースの予算規模であるにもかかわらず、「活動Ａ」コースに申請している）と思われる事例が例年見受けられます。申請する活動内容の予算規模に応じた適切なコースを選択するよう注意してください。

■学校部門

〈幼稚園・保育園・認定こども園等〉

・水遊びプール等を対象と明記

河川や水辺を体験の場とする学習活動だけでなく、園内等での水遊びによる水との触れ合いを通じた学習活動も助成の対象となることをより明確にすべく、園内での水とのふれあい活動のために必要な水遊びプールなど遊具・玩具等も助成の対象となる旨を明記しました。

〈小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等〉

・助成区分の名称変更

「スタートアップ」から「アドバンス」へステップアップを図るのではなく、より多くの学校で「河川教育」に取り組んでいただき、河川基金助成をご活用いただければとの思いから、フラットな表現の「単学年」、「複数学年」へと変更いたしました。

・とりくみ支援については連続２回まで

「河川教育とりくみ支援」助成は、「河川教育」を準備いただく助成区分のため、できるだけすみやかに「単学年」、「複数学年」への活動にステップアップしていただきたく、継続申請については、連続２回までとしました。

〈河川教育に関する実践的研究〉

・助成対象を幼稚園等にも拡大

「幼稚園・保育園・認定こども園等」の教員の方にも、河川教育の研究を行っていただけるよう対象を拡充いたしました。「幼稚園・保育園・認定こども園」に所属する研究者の方も「河川教育に関する実践的研究」へ申請いただけるようになりました。

・研究例示の追加

新しい学習指導要領ではアクティブ・ラーニングが重視されており、また、教材開発においてもドローンやVR（Virtual Reality（仮想現実））、AR（Augmented Reality（拡張現実））の活用が進められていることから、実践的研究の例示に加えました。

■その他

・新型コロナウイルス感染症対応の特別措置に関わる取り扱いについて

研究者・研究機関部門及び川づくり団体部門につきましては、2020年度（令和2年度）に助成を受けている方のうち、新型コロナウイルス感染症の影響を受けることから活動期間を次年度まで一年延長する特例措置を受けている方については、2021年度（令和3年度）の申請ができませんのでご注意ください。

＜参考＞2020 年度（令和２年度）助成区分別申請件数と採択件数の状況

	助成対象者	助成区分	申請件数	採択件数
研究者・研究機関部門	研究機関	一般的助成	7	4
		学術図書出版助成	0	0
		アウトリーチ活動 A	2	2
	一般研究者	一般的助成（60 歳未満の研究者）	178	64
		学術図書出版助成	0	0
		アウトリーチ活動 B	6	2
		アウトリーチ活動 C	0	0
	若手研究者	一般的助成（35 歳以下の研究者）	31	16
	ジュニア研究者（クラブ活動）	高等学校のクラブ活動	6	6
		中学校のクラブ活動	1	1
	小　　計		231	95
川づくり団体部門	流域川づくり団体	活動 A	33	23
		活動 B	34	23
		活動 C	15	9
	全国川づくり団体	活動 A	19	18
		活動 B	6	5
	新設川づくり団体	新設川づくり団体自立支援助成	8	6
	小　　計		115	84
学校部門	幼稚園、保育所、認定こども園等		4	4
	小、中、高等学校、特別支援学校等	河川教育とりくみ支援	14	14
		スタートアップ（単学年）	26	25
		アドバンス（複数学年）	29	28
		河川教育に関する実践的研究　※	1	1
	小　　計		74	72

※ 2021（令和３）年度からは幼稚園、保育所、認定こども園等も助成対象者となります。

TOPICS

河川財団賞および河川財団奨励賞の募集を開始

河川基金では、助成事業による成果が、社会に還元されるべく、研究の成果をもとに、学術論文への投稿、あるいは、実用化のための技術開発などを通じて、社会に貢献する取り組みを奨励しています。

■ 表彰の内容

本表彰では、河川基金による助成事業で実施した調査・研究の成果をもとに、学会等に論文として発表することにより学術的・社会的に評価された研究実績や、研究成果を実用化させ、大きく社会に貢献・活用されていると認められる技術を開発するなど、河川・流域の視点から防災・減災の取組みや水資源の利用の合理化、河川環境の保全等に関して卓越した功績を上げた助成研究者を表彰します。

賞の名称	対象	副賞（研究奨励金）
河川財団賞	特に卓越した功績が認められた助成研究者	50 万円
河川財団奨励賞	今後の活躍が期待される、優秀な若手助成研究者	20 万円

■ 表彰の分野

【学術貢献分野】

助成事業の研究成果をもとに、学会に発表した論文等の研究業績により、河川等に関する学術の進歩・発展に顕著な貢献をなしたと認められる助成研究者を表彰します。

対象者：過去 5 年間に対象となる助成事業が終了した助成研究者

【技術開発分野】

助成事業の研究成果をもとに、河川等の現場での実践を通じて、河川管理等の推進に寄与する技術を開発・実用化し、社会に貢献したと認められる助成研究者・研究機関を表彰します。

対象者：過去 10 年間に対象となる助成事業が終了した助成研究者または研究機関

■ 募集期間

2020 年（令和 2 年）**10 月 1 日～11 月 30 日**

■ 申請方法

河川財団ＨＰから申請書類をダウンロードし、E-mail にて申請してください。
※詳細につきましては河川財団ホームページにてお知らせいたします。
www.kasen.or.jp/kikin/tabid305.html

河川財団賞　検索

2021 年度（令和3年度）
河川美化・緑化事業の募集を開始しました

地域の皆様の多様な活動にきめ細かく対応できる事業制度となっています。
積極的なご応募をお待ちしております。

■ 募集期間

2020 年（令和２年）**10 月 1 日～11 月 30 日**

■ 申請方法

募集要項は河川財団 HP に掲載しています。

https://www.kasen.or.jp/jyosei/tabid59.html

申請様式をダウンロードし、必要事項を記入の上、申請受付専用メールアドレスへ送ってください。
申請受付メールアドレス：ggg-shinsei@kasen.or.jp

〇助成コース

活動規模により４つのコースを設定しています。
- 「活動 A」コース　20 万円（定額）
- 「活動 B」コース　10 万円（定額）
- 「活動 C」コース　5 万円（定額）
- 「大規模植樹・植栽」コース　100 万円（上限）

〇助成の対象となる活動

河川及びその近傍における次のような活動が助成の対象となります。
イ）河川の美化（河川清掃活動、花壇の整備等）
ロ）河川の健全な緑化（植樹・植栽、植生管理等）
ハ）河川の環境改善･保全･防災等（外来種（植物）駆除、樹木伐採、除草・草刈、川の多自然化・浄化等）

＜河川美化・緑化事業とは＞

公益財団法人河川財団と公益社団法人ゴルフ緑化促進会（略称 GGG）とが連携し、国民生活をとりまく環境の緑化推進の一環として行っている取り組みです。ゴルファーの皆様から頂いた協力金（「緑化協力金」といいます。）を元に、河川等における美化、健全な緑化、環境改善・保全・防災等の活動に対し助成を推進し、河川環境の向上を図り、緑化協力金の理解促進に寄与しようとするものです。

5年生　流れる水のはたらきの授業風景

特　集

ドローンを活用した教材開発に挑む

WEB ページを活用した新しい教材作成

河川教育の導入について教材開発を行った遠藤先生へ伺いました

以前、中学校で勤務していた折、自然科学部の顧問を担当していた頃、川に関する助成はないものかと調べ、「河川基金」を見つけました。一昨年、初めて河川基金を申請したことがきっかけとなり、「河川教育」を導入しました。今回題材となっている一級河川の江合川は、緒絶川（おだえがわ）と同様に本校児童がよく知る川として身近なものですが、児童と話をしてみると、意外にも名前を知る程度でしかありませんでした。児童のほとんどは、実際に川へ行った経験もなく、その辺りにはメダカなどの絶滅危惧種が生息していることを知る子ども達もあまりいませんでした。身近な江合川にもっと興味を持ってもらいたい！との思いから川を身近に感じられるような教材を作れないかと考えはじめました。

以前より河川教育を取り入れた学習ができないものかと考えておりましたが、本校は総合的な学習の時間として特に川について調べる学習はありません。そこで、5・6年生の理科の授業における川を題材とした単元を使い、河川教育を関連させて実践できないものかと検討しました。

ドローンの活用について

本来なら理科の授業として実際に川へ行き、川原の石や流れの速さ、侵食の様子を生徒自身に観察させたいと考えましたが、時数の制限や付き添いの教員数の課題があり、実際に観察に連れて行くことは大変困難な状況でした。それを補うには、ＮＨＫの教育番組等で川の様子を見せることで観察の代わりとしている学校が多いのではないでしょうか。

私たちの身近な川「江合川」は、上流～下流で非常に変化に富んだ川であり、教材としてとても適している川ですが、実際に川に入って動画や写真を収めることは危険も伴う為、ドローンを活用した撮影を考え、実際に教材開発へと動き始めました。

今回、河川基金で初めてドローンを購入し、撮影の前には操縦の練習も行いました。現場では、河川の状態を観察しやすくするためにドローンの高度を一定に保つなど、工夫を凝らして撮影に挑みました。実際にドローンを使っての撮影には5日程かかりました

が、実は非常に苦労したのは撮影の事前準備でした。ドローンを使用しての撮影については、飛行禁止の場所が存在するので特に注意が必要です。今回の撮影ポイントは、人口集中地区（ＤＩＤ）と重なるところがあるため、地図と照らし合わせながら飛行禁止エリアを避けるように行いました。場所によっては他の電波と干渉するためか、川幅２４０ｍの川の真ん中でドローンが操作不能となるアクシデントもあり、現場ではかなり焦りました。幸いドローンが出発地点の位置を記憶しており、自動で戻り心底ホッとしました。

ドローン撮影から教材開発、そしてＷＥＢページ作成まで全て行うのは大変な道のりでしたが、「できることがあれば何でも挑戦しなさい」という前田校長先生の励ましのお言葉と、周りの先生方の協力があってこそ実現したのだと思っています。

動画・ＷＥＢページ作成の工夫

今回の教材開発には様々な工夫が凝らされています。撮影・編集を担当された遠藤先生に詳しく伺いました。

初めはドローンの映像だけで動画作成を考えましたが、風景だけでは距離や高さが分かりにくいので、動画編集ソフトでテキスト解説を入れました。また、川幅がどれくらいなのか？どこから撮影し高さはどれくらいなのか？なども分かるようにしました。さらに、操縦画面も動画の右下に入れることでドローンと操縦者の距離をリアルタイムで表示させました。県内の人であれば誰でも撮影場所が把握できるよう地図も付けました。

教材を5、6年生の理科で扱い易くするために、「河原の石」であれば石を収録した映像を中心に、「流れる水の働き」であれば浸食をまとめた映像を編集するなど、単元を意識した編集にしました。映像を見て話し合うなど授業で使いやすくするため、一つ一つ短時間でまとめるよう心掛けました。

授業での効果について（熊谷先生）

河川基金助成事業の申請は当時理科の専任教員であった遠藤先生が行いましたが、実施段階となった年には学級担任になったため、授業での活用は理科専任教員となった熊谷先生が行いました。授

最近の取り組み

昨年度に引き続き、５・６年生の理科において、作成したWEBサイトを活用して授業を行っています。今年度は新たに、４年生社会科の「水はどこから」という単元で、水源について考える授業の際に、私たちの江合川の上流はどのようになっているのか、ドローンの映像で確認しました。班ごとにタブレット端末を与え、自由にWEBサイト内を調べることで、主体的に川の上流（水源）について調べることができました。

業で活用した時の効果などを熊谷先生に伺いました。

児童にとってドローン自体が興味深い物であったこともそうですが、何よりもその機器で自分達の身近な川が撮影されたと聞くと、さらに子ども達の興味関心を高めることができました。実際に撮った映像では、自分たちが知っている川の風景ではなく山深い上流、広い河口の様子を観察することができました。普段なかなか行くことのできない場所の映像を見ることは、子ども達にとっても有意義な時間になったようです。ドローンの機能として飛距離が分かる表示があり、実際に何メートルの川幅なのかを理解するのに役立ちます。

昨年の授業では、地域の川の地図と写真を合わせながら、それぞれの地点の川の様子を理解する教材として使用しました。児童には、石の大きさと水の流れの関係などを捉える教材として効果的でした。

WEBページ活用と今後の学習について

WEBページは児童が学習のまとめとして映像を活用する、教師が解説しながら紹介することを想定して作成しました。小学校を対象とした「理科教育のあゆみ」という冊子で広報し、今後は「北部教育研究会（指導力等を高め合うこと等を目的に当地域の教員で構成している部会）」を通じて、多くの教員の参考となるよう紹介や活用を促していきたいと思います。皆様からの様々なご意見を頂きながら、将来的には中学校の授業でも活用できるように改善していきたいと思っています。

本来ならば、直接川へ行くなどの体験学習が重要と考えます。河川教育を行うことで、子ども達の生活に最も近い「飲み水」につながります。その水はどこからやってくるのか？どうやって巡っているのかという「水循環」に気付くことは大切な学びだと感じています。実際、ドローン画像の映像を見た児童の中には「あそこの石はつるつるしていたね」と過去に訪れた沢登りの経験とリンクさせていました。

学校として気軽に川に行くということは立地的にも規模的にも難しい状況です。川に行く場合は安全面を考え、より多くの教師が引率する必要がありますが、実際には教員の数は十分ではありません。川に関する学習はしたくてもできないのが現状です。

今回は理科の授業と関連させて河川教育を行うために教材開発を実践しましたが、本校の年間指導計画に位置付けることで、WEBページの利用を続けていきたいと思います。

前田校長先生の想い

「間接体験」や「擬似体験」の機会が圧倒的に多くなった今、ヒト・モノや実社会に実際に触れ、かかわり合う「直接体験」を増やしていきたいと考えます。ましてや、遠藤教諭が今回開発し授業実践した教材については、川幅や水流、川石の形や感覚等、児童に直接体験させることで、より五感を通じて実感として学べるものと捉えます。

しかし、天気等を踏まえ指導最適日を設定する難しさ、現地へ行き体験する指導時数の確保、安全面への配慮事項、移動経費等といった様々な制約から、直接体験を主に実践することには難しさがあります。

間接体験ではあるものの、より実感を持たせて学習を展開したい。そのような思いを、今回の実践のみならず、多くの教員が日常的に抱いていると認識しています。

今回の遠藤教諭の教材は、理科の実践に留まることなく、多くの教員が抱く〝より実感を持たせて学習を〟との思いに対して、「工夫の仕方」を気付かせる価値もあったと感じています。

独自のカリキュラムの継承

学校は人事異動により年度毎に教員が入れ替わります。本校も、例外ではありません。

古川第一小学校では年間指導計画という一冊のファイルがあります。

これに細かな指導計画が記録されており、その年度が終わった頃には、改善点などが追加されていきます。このファイルを通して学校で行われた新たなプログラムも上手く引き継がれていく役割を果たしているのだと思います。今回の教材についても、授業そのもので再び活用したりする等、本校においても活用していきたいと考えております。

大崎市立古川第一小学校

明治	6年 5月	極楽寺に大柿小学校設立（現在 開校147年）
	24年 7月	古川町立古川尋常高等小学校と改称
昭和	34年 10月	米倉小学校を統合し古川第一小学校と改称
平成	16年 10月	文部科学省指定「学力向上フロンティア事業」公開研究会（2年次）
	19年 9月	文部科学省指定「確かな学力育成のための実践研究事業」公開研究会（3年次）
	23年 3月	東日本大震災により、南北校舎大破・解体
	24年 1月	大崎市教委・大崎教研共催　学習指導自主公開研究会（1年次）
	24年 11月	大崎市教委・大崎教研共催　学習指導自主公開研究会（2年次）
	25年 7月	新校舎完成
	26年 1月	宮城県教委指定　学力向上指定校事業　学習指導（国語）公開研究会（1年次）
	26年 11月	宮城県教委指定　学力向上指定校事業　学習指導（国語）公開研究会（2年次）
	27年 11月	宮城県教委指定　学力向上指定校事業　学習指導（国語）公開研究会（3年次）
	28年 11月	大崎市教委・大崎教研共催　道徳：自主公開研究会（1年次）
	29年 11月	宮城県教委指定「豊かな心を育む研究指定校事業」道徳：公開研究会（2年次）
	30年 11月	宮城県教委指定「豊かな心を育む研究指定校事業」道徳：公開研究会（3年次）
令和	2年 1月	宮城県教委指定「学力向上指定校事業」算数：公開研究会（1年次）

（写真左）
遠藤 拓海　Takumi ENDO

古川第一小学校　教諭
宮城県大崎市出身
古川第一小学校4年目。
令和元年度6年生担当教諭。理科主任。

（写真中央）
前田 正　Tadashi MAEDA

古川第一小学校　校長
宮城県気仙沼市出身
平成31年度より古川第一小学校へ。

（写真右）
熊谷 俊祐　Shunsuke KUMAGAI

古川第一小学校　教務主任
宮城県大郷町出身
古川第一小学校9年目。
令和元年度5・6年理科専科

カヌー体験

INTERVIEW

河川基金助成の現場から

ひたかみ水の里

NPO法人ひたかみ水の里

代表理事　新井 偉夫さん　理事　新井 高広さん

団体の設立について

NPO法人ひたかみ水の里（宮城県）は歴史が20年という長いNPOです。会員は現在70名ほどで、北上運河をメインフィールドとして活動を続けています。毎週土曜日にはカヌー体験教室の開催（カヌーは約20艇）しており、水質調査やキャンプなども行っています。

ひたかみ水の里は、２０１７年（公財）マリンスポーツ財団主催のライフジャケット普及プロジェクト（WEAR ITI）において、その年のイベントの中でライフジャケット装着者が日本で最も多く集まったことから表彰も受けたそうです。

団体の名称にある「ひたかみ」は北上川の上流に日高見国（ひたかみのくに）というのがあり、そこから付けたそうです。「北上川」という名称も「日高見（ひたかみ）」に由来する説もあり、平安時代には北上流域を指すことになったとされています。

「ひたかみ水の里」の設立に深く係っている代表の新井偉夫さんに設立当初の話を伺いました。

元々東京生まれの偉夫さんは、当時５歳の終戦間際に、母の出身地である石巻に疎開しました。水辺環境が多い石巻でしたが、川の環境は決して良いとは言える状態ではありませんでした。当時の川はゴミ捨て場と化し、社会的にも排水路として使用した時代。そんな汚れた川を見た偉夫さんは、川の環境をきれいにして魚も住める環境に変えなくてはいけない！と強く思ったそうです。川が綺麗になれば、魚や生物も戻りそして人々も水辺に集うようになる。そんな風に是非変えたいと思った新井さんは団体を設立しました。設立当初の活動は清掃活動がメインでしたが、団体の活動に加え、ＲＡＣ（川に学ぶ体験協議会）、ＣＯＮＥ（自

ひたかみ水の里

ひたかみ水の里今後の活動の重点

水辺で乾杯

これまで通り、地域の子ども会や学校を中心に川に親しむ活動の支援や、川にも怖いところもあるが正しく恐れることが安全に活動する事であることを教えていきたいと思っています。親水空間の整備、ハードというよりソフト面での支援、特に、自分（高広さん）は料理の経験があるので、カフェスペースをつくり、河川の風景を見ながら人々が集える場ができたら良いと思っています。

然体験活動推進協議会）の設立にも深く係り活動をしてきたそうです。

偉夫さんの息子・高広さんは、東京で料理の勉強をしていましたが、東日本大震災をきっかけに地元に戻りました。小さなころから父の活動を身近で見ており、よく参加もし経験を積んでいたので、地元がピンチを迎えた時、地元に戻る道を選びました。

水難事故が多いことについて

ひたかみ水の里でもカヌーの体験活動などの水辺で体験をする際は、ライフジャケットを身に着けることが重要だということは説明しています。

今年は、新型コロナウイルスの感染防止を考え、例年以上に川に出かける人が多く、水の事故が多発しています。川の利用者に向けて、川で遊ぶときにはライフジャケットを身に着ける、救助用のロープを準備するなど、予め安全を確保することが重要です。そして子ども達にライフジャケットの重要性を教えるなどの普及活動を支援する仕組みもまだまだ不十分です。川の専門家の資格を取得する人も増えてきましたが、川は地域ごとに違っていますので、各地域で普及できる仕組みができるとよいと考えます。学校教育でも体育の授業などで命を守るための基礎知識を是非教えてもらいたいと思います。そして河川財団もそのような取り組みに今後も支援を続けてもらいたいと思います。

コロナ渦の中で

例年、小中学校での川の体験活動を支援していますが、新型コロナウィルス感染症の影響で今年度はまだ1校の支援に留まっています。

一方で、7月の4連休に石巻にある石ノ森萬画館を運営している街づくりまんぼうが主催のイベントで、カヌー体験の依頼がありました。蓋を開けてみると、なんと！2日間で170名の申込があり多くのお客様にお越しいただきました。地域限定の折り込みチラシと地元のラジオでのアナウンスだけでしたが、お昼も食べられないような盛況ぶりでとても驚きました。

コロナと共に過ごす新しい生活様式では、普段、制約だらけの日々に疲れた多くの人々が、自然の中で過ごす心地よさを求めているのかもしれません。

新型コロナ感染症対策

有料の体験活動予約サイトにひたかみ水の里も掲載していただいていますが、そこの運営事業者がハワイの大学の疫学専門家の監修を受けて、体験活動用のガイドライン（チェックリスト）を作成しており、活用させていただいています。

体験活動を支援する学校等にも、これに基づいて実施する旨を説明しており、保護者のみなさまやお子さんたちにも安心して参加してもらうためのガイドラインとして大いに活用させていただいています。

参加者の皆様には、検温チェックやアルコール消毒も実施しており安全に活動が出来ています。野外では、非接触型の検温機器については、機種によっては日射の状況により的確に計測できないこともあるので、少し高価にはなりますが、確実性が高い検温機器を購入することをお勧めします。

ご参考

アソビュー 観光施設向け新型コロナウイルス対策チェックリストについて

アソビュー株式会社　監修：ハワイ大学 疫学専門家 岡田悠偉人 NEW NURSING 株式会社

継続性の確保と行政の支援について

活動を継続して行うことは市民

ひたかみ水の里

から信頼を得るうえでも大事なことです。

継続した活動を支えるのは「人」であり、人数を確保するのも大変ですが、ひたかみ水の里では、人手が必要な時、高校時代の同級生など知り合いや町内会、また、地域の子供たちを対象とした自然体験クラブであるめだかっこクラブの中高生などが手伝いに来てくれます。また、企業との連携協力もあります。北上川でイベントをするときには救助艇を出していただいたり、カヌーで乗り降りできるよう浮桟橋も用意してくれたりするサポートは心強い限りです。

資金面の確保については、県から運河の両岸８００ｍについて除草を行う業務を随意契約で受託しています。その契約は15年くらい前から始まっています。昔と違って現在では、行政も地元の団体を積極的に支援する姿勢に変わってきていると感じます。地域のことを一番知りつくし、地域の自然を想う地元の人々を大切に育んでいる団体を支援することはとても大切なことだと思っています。

各地域の河川にこのような団体が活動を続けられるような社会をつくっていくことが今の日本には必要であり、石巻では「ひたかみ水の里」が行政や地域住民との良好な関係を構築し、先取りしたかたちで実現していると自負しています。

県の環境対策課では、川の環境を守る団体に対して、資金援助ではなく、生き物調査用の網やバケツ、水質調査用のパックテストの器具、本、図鑑等物資面での物資支援を行ってくれており大変助かっています。

さらに、宮城県ではスマイルサポーターという制度があり、認定団体には法面用の草刈り機を燃料込み＋無償で貸してくれます。たとえば河川美化でゴミ収集を行うと、自転車や冷蔵庫などの粗大ごみが出てきたりしますが、宮城県と石巻市とが連携し固定の場所へ置いておくと引き取ってくれます。

※スマイルサポーター
宮城県では、ボランティアで道路・河川・海岸・公園等の県管理施設の清掃や緑化作業を行い、良好な環境づくりに積極的に取り組む個人、団体を「スマイルサポーター」として認定し、「里親」となっていただく制度を立ち上げています。

国との連携

北上川下流河川事務所の方々とミズベリングで連携を行っています。

・印象的な思い出としては、今市が管理している準用河川の中里川はもともと農業用水路でしたが、23年くらい前に暗渠にするという計画が持ち上がりました。我々は、子ども達が生き物と触れ合える親水性のある川にしなければとの思いで運動を行い、８００ｍを残すことになりましたが、市では整備の財源が確保できず困り果てて、国土交通省へ相談に行ったところ、宝くじ基金を紹介くださり整備の費用を確保することができました。

最近では、東日本大震災での復旧事業として、新たに堤防をつくる計画が出てきました。（今年度完成予定）その際には、堤防のデザインについて意見を聞かれ、めだかっこクラブの子供たちの意見なども聴取されました。

国土交通省方々からも川づくりについて、地元の意見を吸い上げるために、気さくに私たちと意見交換の機会もあり、良い関係を築けていると思います。

ミズベリング視察時

（写真左）新井 偉夫　Hideo ARAI
NPO 法人ひたかみ水の里　代表理事

出身：東京
CONE（自然体験活動推進協議会）初代理事
Rac（川に学ぶ体験活動協議会）初代代表
北上川流域連携交流会 下流代表を務め、NPO 法人ひたかみ水の里を設立。

（写真右）新井 高広　Takahiro ARAI
NPO 法人ひたかみ水の里　理事

出身：宮城県石巻市
父（代表理事）に連れられ川のイベントや講習会に小さい頃から参加。
高校卒業後に上京し、飲食関係の学校と仕事をするが東日本大震災発生を機に石巻に戻りひたかみ水の里に従事する。

涸沼キャンプ　川遊び

INTERVIEW

河川基金助成の現場から

自然体験が保育理念の基本。そこに子ども達の笑顔が！

NPO法人つくばハーモニー　ラ・フェリーチェ保育園

園長 髙橋 晃雄 さん　副園長 齋藤 隆 さん

●自然体験を保育理念にする保育園を作る

私は東京都葛飾区の中川の畔で生まれ育ったこともあって、川は当たり前にあるものであり、毎日の遊び場でした。また祖父と父、叔父も釣りが趣味だったことから、釣りは生活の一部になっていました。このような小さな頃からの水辺の楽しい思い出が根本にあり、その後、八丈島で新聞記者として社会人のスタートを切った際に雄大な自然に触れることで改めて、自然体験活動のすばらしさを実感しました。

当保育園の運営のきっかけとなったのは、その新聞記者時代に、地方政治に興味を持ち、中学時代に引っ越した茨城県藤代町の町議会議員となったことでした。町議会では教育・福祉関係の常任委員の委員長として、〝小貝川の自然環境を活用してみんなで楽しく遊ぼう〟をコンセプトとした「小貝川3次元プロジェクト」を担当。プロジェクトを推進するNPOの運営や、水辺の安全講座や防災も絡めたプログラムに取り組みました。現在当園副園長をして頂いている齋藤さんと出会ったのは、このプロジェクトを通してです。議会では保育園も担当したことから、議員引退後に保育事業に参入する企業にスカウトされ、保育園の運営に参加することになりました。２０１１年の大震災後、企業から現在の保育園の経営を引き取ることになったのですが、この保育園は近くに里山と遊水地を活かした公園があり、小貝川もそれほど遠くないことから、自然体験を保育理念の柱の一つとした保育

自然体験が保育理念の基本。そこに子ども達の笑顔が！

ラ・フェリーチェ保育園　高橋晃雄さんと齋藤隆さんの取組み

ザリガニ釣り

ザリガニの模型づくり

保育園・幼稚園の体験活動導入プログラムのモデルとして園庭に低予算で設置と管理が簡単なザリガニ池を作りました。ザリガニは、水辺の生物のなかでも特に生命力が強く、春から秋まで、保育指針にある「自然とのかかわり・生命尊重」に基づいたプログラムに活用できる教材です。
今年は、1歳児から5歳児までの様々な設定保育に活用しました。今後は、マニュアル化して普及を図りたいと考えています。

園事業が可能だと考え、運営母体となるNPOを齋藤さんと設立しました。

「四季の小貝川保育園」プロジェクトは、2016年の「川に学ぶ体験活動協議会（RAC）」の「全国一斉1万人・川の流れ体験活動キャンペーン」に参加して、園児と保護者に川流れを体験させたことがスタートです。

小貝川をフィールドとして選んだのは、議員時代に関わっていた「小貝川3次元プロジェクト」の活動で周辺をよく知っており、どこにリスクがあるか、イメージではなく具体的なシミュレーションとして想定することができたからです。

●水辺の体験活動のハードル

水辺の体験活動を始めるにあたって難しかったのは、保護者の理解と同意でした。保護者に概要の説明を行ったところ、体験活動の危険性や水質などを懸念する意見がありました。親が水辺での体験活動の経験が少なく、イメージしにくいことが要因なのではないかと思います。RACトレーナーの同行など安全性の確保について説明しても不安を払拭しきれなかったので、「それなら一緒に参加してもらおう」と考えて、活動を始めてから2年間は親子参加としました。その後は、2年間の経験と成果から保護者の不安は払拭でき、3年目からは園児だけの体験活動に移行しました。当園の恒例行事として定着した水辺の体験活動は、今では、保護者の方に概要を伝えておけば、翌日の実施でも異論が一切出ないほどの信頼を得られるようになりました。

また、水辺の体験活動の対象年齢は、初年度は保護者同伴を条件に3、4、5歳の受け入れを行っていましたが、子どもだけが水辺の体験活動に参加できるようシフトしたことや、発達段階のことを考えた結果、2年目以降は5歳児のみに限定しました。

●河川教育を通した園児の「気付きと変容」

「四季の小貝川保育園」の目標には、①自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く、②季節による四季変化に気付く、③生命の尊さに気付き、いたわり、大切にする、④感じたことや考えたことを自分なりに表現する、という4項目を設けています。

子どもの変容という点で最も大切なのは「気付き」だと思っています。子どもは気付きが得られると、驚きや、発する言葉や表情に変化が表れます。しかし、子どもたちはその感動がなかなか長期記憶に結びつきません。そこで体験活動を行なった日に絵日記を書かせて、長期記憶に結び付けるように工夫してみました。そうすると絵日記を書きながら子どもたち同士で「気付き」を共有し始めたのです。一人の子どもが「水がキラキラしてきれいだったよね！」と興奮しながら言うと、他の子どもたちが「そうだよね！」と共感し、体験時の「気付き」を思い出していきました。

もう一つ、体験活動を長期記憶化させるにあたって「五感に訴える活動」を意識しています。わかりやすい例として覚えているのが、小貝川の河川林で昆虫採集をした時のことです。昆虫図鑑を全部覚えていた子どもがいたのですが、その子は、実際に虫を見つけても虫の名前が言えませんでした。また、虫を触った子どもは、その虫を採ったことを覚えているのですが、見ていただけの子どもは、ほとんど記憶に残っていません。子どもは、生物を見て触って、初めて理解できるようです。

自然体験が保育理念の基本。そこに子ども達の笑顔が！

また、子どもの目の前に林と川が見えたら、子どもたちはまず川へと向かいます。水辺でも水たまりでも、子どもは自分たちで遊びを考えて、飽きることなく遊び続けます。つまり、子どもたちにとって水辺は、常に興味の対象なのです。幼児教育における水辺の体験活動は特殊なものではなく、園庭での泥遊びの延長線上にある活動なのです。

●安全管理と多彩なプログラムが継続につながる

体験活動を続けるうえで必ずネックになるのは、保護者の同意形成と体験活動のフィールド探しです。保護者の同意形成は、体験活動を始めるにあたって、安全確保について説明を行うとともに、使用したライフジャケットをプレゼントして、私的に使用してもらったことも安全性のPRにつながったと感じています。

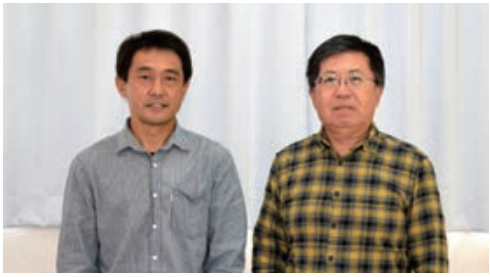
フィールドについては、前述の安全性と衛生面で問題がない場所を使うようにしています。安全面については、台風の影響などで水位や流れの変化が激しい場所や、水底にルアーが落ちているなど安全確保が難しいところは避けるようにしています。衛生面については、どうしてもトイレが重要です。衛生的なトイレが水辺に増えることを願っています。

また、意識していることとして、フィールドは、複数案を持つようにしています。昨年は、長雨と台風の影響で小貝川が増水して利用できない日が続きましたので、フィールドを増水時も流れが緩やかな涸沼に変更しました。涸沼は、私がよく釣りに行く場所でもあります。キャンプにしても同様に天気や場所の状況で何回も調整して、子どもにとって、最高の日に最適な場所でベストな状態の体験活動を実践できるようこころがけています。

●体験活動の普及啓発に向けた研究と今後の展望

幼児の体験活動では、五感を刺激する体験こそが生きる力を育んでいきます。特に河川空間を活用した体験活動は、効果が高いと考えています。しかし保育指針にもあるように、体験活動の必要性は理解していても、体験活動をやろうとする保育園や幼稚園は全国的にも少ないのが現状です。この現状を変えるためには、一つでも多くの園で体験活動を実践するためのマニュアルが必要だと思い、今年から河川財団の研究部門の助成金を頂いて活動を始めました。

保育園や幼稚園では、カリキュラムに柔軟性はありますが、体験活動を保育計画に盛り込むことは、なかなか難しいものです。そこで初年度は「どこの保育園でも比較的簡単なプログラム」として、身近な水辺の生物であるザリガニを題材にしました。このプログラムは、低予算で幅広い年齢に対応したものとしました。来年度は、RACの指導者など外部講師と協力して行う川遊びやEボートを活用した、アクティブな体験活動を紹介したいと考えています。体験活動を行うためには、楽しいフィールド、安全な企画、指導者の確保、交通手段、必要な用具、予算の6条件が必要です。6条件さえそろえば川遊びやEボートなど敷居が高く感じられる体験活動が未経験の保育園や幼稚園でも実施可能なのです。あとは、予算と決定権ですから、園長先生など管理者の決断一つです。私は、保育園向けの体験活動マニュアルで、体験活動に取り組む保育園を広めたいと考えています。子ども達は川や水が大好きです。ぜひ全国の子ども達に水に絡む体験活動をさせてあげたい、そのために保育士と管理者が興味をもって、「できる」という気持ちで取り組んで頂きたいと強く願っています。



（写真右）
髙橋 晃雄　Akio TAKAHASHI
ラ・フェリーチェ保育園　園長

・（元）藤代町議会　教育福祉常任委員長
・（元）藤代町 PTA 連合会　会長
・（元）つくば市子ども・子育て会議　委員
・NPO 法人　つくばハーモニー　理事長
・NPO 法人　川に学ぶ体験活動協議会　常任理事

（写真左）
齋藤 隆　Takashi SAITO
ラ・フェリーチェ保育園　副園長

・NPO 法人　川に学ぶ体験活動協議会　事務局長
・NPO 法人　つくばハーモニー　理事
・RAC（川に学ぶ体験活動協議会）トレーナー
・NELA（全国体験活動指導者認定委員会）主任講師
・保育士

INTERVIEW

河川基金助成の現場から

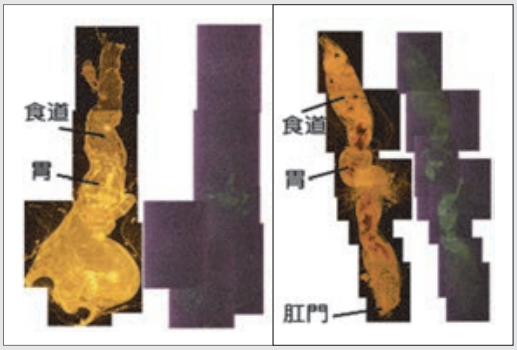
「トンボの生態から薬剤耐性菌を探る、ジュニア研究者の奮戦」

市立札幌旭丘高等学校　生物部（2年）葉山 結月さん
生物部顧問　大宮 祐男さん

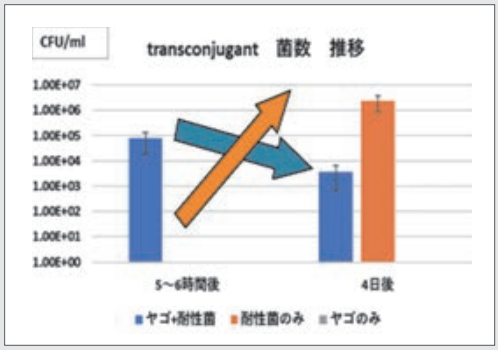
河川基金助成事業研究者・研究機関部門において、「自然界の薬剤耐性菌を探せ！Ⅲ　～トンボと河川を巡る耐性菌～」という高校生にとっては難関な研究課題に果敢に取組んだジュニア研究者たちにいろいろとお話を伺いました。

トンネウス沼での調査（月に３回調査を行っています）

北大での実験
（ヤゴの糞便を取り出しています）



ヤゴの腸管内
（GFP 菌が集積しているところが緑色に発光しています）



水平伝播による菌数の推移（5～6時間後の時点で、ヤゴ体内で水平伝播が進んでいることがわかります）

薬剤耐性菌とトンボのマッチング

【葉山】４年前、先輩がＧ７で薬剤耐性菌の危険性を知り、そこから耐性菌について調べ始めました。抗生物質の効かない薬剤耐性菌については世界的にも注目されていますが、自然界での分布状況や増殖するシステムについての研究が進められていないことがわかりました。

そこで、自然界の薬剤耐性菌の動向を、トンボを通して調べることにしました。トンボはヤゴ（幼虫）の時に水中で、成虫になったら陸上で過ごします。水陸両方の影響を受けることが、薬剤耐性菌の研究に適していると考えた訳です。

【大宮】本校では、綿路（わたじ）前顧問の時から10年以上トンボの研究をトンネウス沼で実施しています。どの時期にどんな種類がいるのか、継続調査しています。トンボを調べながら、毎年派生した研究をする中で薬剤耐性菌という視点が今回出てきました。

トンボの生態から薬剤耐性菌を探る、その解明における北大との連携

【葉山】私たちは、トンボの生態観察結果から、薬剤耐性菌がヤゴ体内で増加しているのではないかと考え

「トンボの生態から薬剤耐性菌を探る、ジュニア研究者の奮戦」

市立札幌旭丘高等学校生物部　葉山結月さん達の取組み

トンネウス沼のナツアカネ雄

セスジイトトンボ雄

生物部では長年トンネウス沼において、どの時期にどんなトンボが何個体いるかモニタリング調査をしています。これをベースに様々な研究に取組んでいます。最近では、トンボと地球温暖化の関係を調べるため、ナツアカネとアキアカネに着目した研究を行っています。週末のトンボ採集調査に加えて、ラボでの実験も平行して進めています。研究活動以外でも、ミジンコ、プラナリア、アオダイショウ、カエルなど様々な生き物を飼育しています。

ました。そこで、ヤゴを薬剤耐性菌が添加された水で飼育し、菌数の変化を調べました。また、ヤゴの体内で薬剤耐性菌が集積しているところがあると考え、緑色蛍光タンパク質（ＧＦＰ）遺伝子を組み込んだ細菌（ＧＦＰ菌）を添加して飼育し、腸管内や糞便を蛍光顕微鏡で観察しました。

今回の研究の結果、水平伝播という現象によって、短時間の内にヤゴの体内で薬剤耐性菌が大幅に増加することがわかりました。また、ＧＦＰ菌がヤゴの胃に集積すること、全個体のヤゴの糞便にＧＦＰ菌が含まれることを確認しました。

このことから、河川水中にある薬剤耐性菌は、ヤゴが昆虫を食べる際などにヤゴ体内に入り、胃に集積して増加した後、腸管から排出され河川に戻るという可能性が示唆されました。

【大宮】今回の研究では遺伝子組換え細菌を使うので、高校の設備では実験観察を行うことができません。そこで、北海道大学に協力をお願いして遺伝子組換えができる施設を使わせていただき、６月下旬から８月末にかけて２カ月以上実験室に通いました。北海道大学大学院保健科学研究院では施設の使用だけでなく、先生方に数十回に渡ってご指導をいただき大変感謝しています。

【葉山】去年入学した私にとって、今回の研究テーマは難解でした。まだ生物を習う前で、急に大腸菌とか耐性菌が何だとか難しいワードが飛び交って混乱し、何度も先輩に聞いたりしていました。また、私たちが北大に行ける時間は限られているので、私たちが北大にいない時間帯にヤゴがすごく死んでしまったんです。なので、トンボの腸管内を調べることができませんでした。やはり相手が自然なので思うようにいかないと思いました。

ヤゴが死んでしまって実験が中々うまく進まない時に、北大の先生や前顧問の綿路先生から助言をいただいて、先輩と一緒に試行錯誤を繰り返してどうにか成果にたどり着けました。薬剤耐性菌が自然界に結構あるんだな、と実感しました。でも、まだまだ分からない事や課題はあります。

今回の実験では、自然界における薬剤耐性菌の濃度に対して非常に濃い濃度の菌を添加した水でヤゴを飼育したので、本当に自然界でもヤゴ体内で薬剤耐性菌の増殖が行われるのか、まだ解明できていません。

【葉山】今回使用した薬剤耐性菌は実験株で、自然界のものとは異なります。河川水にいる自然界の菌を使ったらもっと明確にメカニズムを解明できると思います。今年は実験できませんでしたが、来年は試みようと思っています。

また、北大の方々には大変感謝しています。初めて研究室に行った日は、中学校では考えられないレベルの知らない器具がたくさんあって「これなんですか?」って何度も聞きました。北大の実験室や設備はすごいなって感動しました。

この研究に参加して得たもの、今後の展望

【葉山】子どもの時は読書が好きで、将来は文系かなと思っていました。中学校の頃は帰宅部でしたが、思い直して高校に入ったら急がしい部活に入ろうと思って生物部にしました。今回の研究では、中学時代には考えられないくらい、色々な体験をしました。そもそも川や沼の中に入るということすら考えられなかったのですが、今はとても楽しくトンボやヤゴの採取や観察をしています。

【大宮】生物部には、トンボに興味のある生徒が多くいます。水がなければトンボは産卵できないし、ヤゴも育ちません。また、沼で調査を行

「トンボの生態から薬剤耐性菌を探る、ジュニア研究者の奮戦」

う際に、水の汚れや岸のゴミなど周辺環境を見る場面が多くあります。

真摯にトンボの生態を見ようとすると、自然環境もセットで意識せざるを得ないということが大いにあると思います。

【葉山】今回の研究成果は、昨年の全道高等学校理科研究発表会の研究発表部門で最高賞である総合賞をいただきました。その時は本当に頑張ってよかったと思いました。また全国大会では、全国の高校生の研究を聴くことができ、自分の世界が広がる素晴らしい経験になりました。生物部で理科に魅力を感じて、現在では将来は理系に進みたいと考えています。

【大宮】生物部では10年以上ずっとトンボの研究を続けています。このデータの蓄積から、今まで少なかったトンボが年々増えてきている、といった変化に気づきます。そこから河川や水との関係など、生徒がテーマを見つけて研究しています。今年入学した生徒も研究の手伝いをしていますが、先輩方を見て研究に魅力を感じる生徒が出てくる、そのことを大事にしたいと思います。

最近は、地球温暖化とトンボの生態に何か関係があるのではないかと、ナツアカネとアキアカネを使って研究に取組んでいるグループもあります。何とか糸口がつかめたらと思っています。

その他、ミジンコやプラナリアを研究している生徒もいます。

主体的な学習環境とその学びを重んじる校風

【大宮】トンボの研究を長年行っていますが、基本的には「生徒の好きな生物とテーマ」を最大限尊重し、自由に研究活動を行っています。自身で研究計画を立てて実行する「自主性」を大切にしています。

生徒たちには、身近な物事に対して各々が日頃抱いている「なぜ?」に対して、物怖じせずに高校生らしい自由な発想で立ち向かってほしいと願っています。

旭丘は前任の綿路先生の指導もありますが、「生徒がやりたいものをやらせたい」というスタンスで来ているので、それは維持したいと思っています。

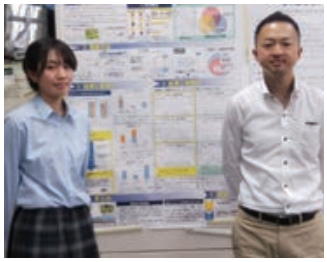
【葉山】自由にやらせてもらったと感じます。また、札幌旭丘高校は単位制で比較的自由なイメージがあります。その一つが「Sunrise Time（サンライズタイム）」で、個々に興味のあるものを探究して、論文にまとめるという授業です。このように、自由や自主性を尊重する校風が良いと思います。また、この高校は山の上にあり眺めも良く、裏には川が流れて、アカネなどのトンボが飛んでいたり、狐も見かけたりします。他の高校より自然が多く、環境にも恵まれていて学びに適した学校です。

【大宮】「Sunrise Time」は総合学習の時間で、全生徒が個々にテーマを選んで研究して、最後に論文作成・発表を行います。テーマは自由です。このような活動を含めて、学校として主体的な学びを重んじていて、生徒の自主性を育むという気風があります。

また、札幌旭丘高校生物部は、毎年全道大会を始め様々な発表会に参加しています。どんな説明資料にするか、どのようにプレゼンすれば相手に伝わるか、顧問の助言をもとに議論し練り上げて挑みます。発表会への参加を通じて、生徒たちは貴重な経験を積むことになります。

この経験が、生徒たちを大きく成長させてくれます。今後ともこの取り組みを支えて行きたいと考えています。

最後に、河川財団の助成制度や表彰制度は、生徒たちの好奇心や探究心を育む制度で、大変ありがたく思っています。今後も、是非継続していただきたいです。



（写真左）
葉山 結月 Yuzuki HAYAMA
市立札幌旭丘高等学校・生物部（2 年）

（写真右）
大宮 祐男 Masao OMIYA
市立札幌旭丘高等学校・生物部顧問（教諭）

【受賞歴】
〔H29 年度〕
全道高等学校理科研究発表大会　研究発表・生物部門　総合賞
日本学生科学賞北海道審査　読売新聞社賞

〔H30 年度〕
全道高等学校理科研究発表大会　研究発表・生物部門　総合賞
ポスター発表部門　優秀ポスター賞
日本学生科学賞北海道審査　北海道教育委員会教育長賞
高校生バイオサミット in 鶴岡　審査員特別賞
全国ユース環境活動発表大会全国大会　優秀賞

〔R 1 年度〕
全国高等学校総合文化祭　自然科学部門・研究発表生物部門出場
コカ・コーラ環境教育賞　次世代支援部門　優秀賞
全道高等学校理科研究発表大会　研究発表・生物部門　総合賞
ポスター発表部門　優秀ポスター賞

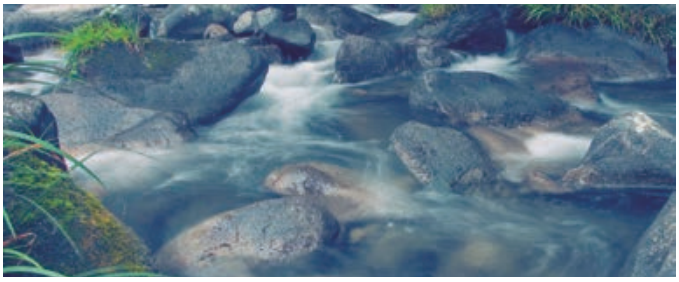
ご寄付の御礼

寄付者の皆様へ

令和元年４月１日から令和２年３月31日までの一年間に、「一般財団法人　宮崎大淀川スポーツセンター」や「釧路リバープロテクション21の会」、「前田建設工業株式会社様」をはじめとする、団体や個人の皆様から2,243,433円のご寄付をいただきました。寄付者の皆様に心より御礼申し上げます。

ご厚志につきましては、河川基金として管理し、その運用益を河川の治水・利水・環境に関する調査、川づくり団体の活動や学校での河川教育を支援する助成事業のために有効に使わせていただく所存でございます。

公益財団法人　河川財団
理事長　関　克己



寄付金の税法上の優遇措置について

当財団は、内閣総理大臣より「公益財団法人」としての認定を受けております（認定日は平成25年３月21日、法人登記日は同年４月１日）ので、当財団への寄付金には上記の河川基金への寄付金及び一般寄付金のいずれについても特定公益増進法人としての税法上の優遇措置が適用され、所得税（個人）・法人税（法人）の所得控除等が受けられます。

詳細は河川財団HPをご覧下さい。

河川財団　検索

河川財団では、昭和六十三年に河川基金（旧名称：河川整備基金）が創設されてから約三十年にわたり助成事業を進めてまいりました。

河川基金は皆様からいただいたご寄付の運用益でご支援させていただいております。この長年の支援は全体で約一万千百二〇件、総額約百二十二億円にものぼります。

河川基金では、河川環境や水環境に関する研究、河川工学や防災に関する研究、災害と歴史や地域社会に関する文理融合的研究等に支援をさせていただいており、また、直接川の活動を行うNPO・市民団体の皆様、河川・水教育を柱とする学校教育にも助成を行っております。

昨今のマイナス金利という非常に厳しい状況ではございますが、今後も引き続き、助成者をはじめ幅広くご意見を伺いながら使いやすい「河川基金」へ、弛まぬ改善を進めてまいります。

多くの皆様からのご応募を心よりお待ちしております。

数字で見る「河川基金」

助成件数
（昭和63年度～2019年度）
約 **11,120** 件

助成総額
（昭和63年度～2019年度）
約 **122** 億円

河川財団は、我が国の助成財団の中で、助成等事業費で上位100財団の79位（2018年度）にランキングされています。

「日本の助成財団の現状」より
助成財団センター調べ
（有効回答数：1,832団体）

助成等事業費
79 位

河川基金

河川基金ウェブサイトをご活用ください。

www.kasen.or.jp/kikin/

河川基金ウェブサイトでは、助成事業に関するイベント等の「活動告知ページ」及び「活動報告ページ」を設けております。助成を受けられている方はぜひご活用下さい。

【活用例】
- イベント等の活動告知
- イベント等のレポート
- 研究等の受賞報告

等

RIVER FUND
河川基金だより
令和２年10月発行
Vol. 43
2020 October

河川財団が「紺綬褒章」公益団体として、内閣府より認定

河川財団は、内閣府（賞勲局）より「紺綬褒章」の公益団体認定（褒章条例ニ関スル内規 第2条）を受けました（平成 29 年 6 月 28 日付）。褒章の一つである「紺綬褒章」は、公益のため私財を寄付した方々（個人では 500 万円以上、法人では 1,000 万円以上）を対象としています。

平成 29 年 6 月 28 日以降、河川財団へのご寄付（河川基金への寄付または一般寄付）をいただいた方で上記条件を満たす場合には「紺綬褒章」の授与申請を致します。

紺綬褒章とは（内閣府 HP より）

公益のために私財を寄附した者を対象とする紺綬褒章は、表彰されるべき事績の生じた都度、各府省等の推薦に基づき審査をし、授与を行っています。

国、地方公共団体又は公益団体（公益を目的とし、法人格を有し、公益の増進に著しく寄与する事業を行う団体であって、当該団体に関係の深い府省等の申請に基づき賞勲局が認定した団体）に対する寄附が授与の対象となります。

※地方公共団体等への寄附について、寄附者が当該寄附に対する返礼品（記念品の類を除く）を受領した場合は、紺綬褒章の対象となりません。

編集発行：公益財団法人 河川財団 基金事業部
本誌はホームページでもご覧になれます。http://www.kasen.or.jp

公益財団法人
河川財団

本部
〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町 11-9 住友生命日本橋小伝馬町ビル(2F)
http://www.kasen.or.jp　E-mail:info@kasen.or.jp

本部
総務部　TEL:03-5847-8301　FAX:03-5847-8308
経営企画部　TEL:03-5847-8302　FAX:03-5847-8308
基金事業部　TEL:03-5847-8303　FAX:03-5847-8309
子どもの水辺サポートセンター　TEL:03-5847-8307　FAX:03-5847-8314
河川総合研究所　TEL:03-5847-8304　FAX:03-5847-8310
東京事務所　TEL:03-5847-8306　FAX:03-5847-8310

名古屋事務所
〒463-0068 名古屋市守山区瀬古 3 丁目 710 番地
TEL052-388-7891　FAX052-388-7918
E-mail:info-n@nagoya.kasen.or.jp

近畿事務所
〒540-6591 大阪市中央区大手前 1-7-31（OMM13F）
TEL06-6942-2310　FAX06-6942-2118
E-mail:info-o@osaka.kasen.or.jp